

献としての体裁を整えたために、学会発表が単なる口頭発表にとどまらずに、文献の裏付けをもった業績として評価されるようになったことである。事実、最近の論文では予稿集を引用する例が増えてきた。

このように発表者に負担を強いたにもかかわらず発表件数が増えてきたことは、発表会場の確保難という新しい問題を生み出したという事実はあるにしても、予稿集の登場が学会々員の間で研究活動を活発化させる契機となったことを示しており、浅井先生のご努力は見事に実を結んだわけである。その後も順調に刊行されていることからいって、予稿集は日本地理学会の中に深く定着したとみてよいであろう。なお予稿集には大会時の巡検案内も収録されているが、これだけを別刷りにしてポケット版に改造したのも好評をえている。これも浅井先生のアイデアによるものであることを付言しておきたい。

## 地 理 学 教 室 の ジ ー プ

齋 藤 功

昭和48年私がお茶の水女子大学に転任しておどろかされたことの一つは、地理学教室にジープがあることであった。それは、三菱J 20Cという型のジープで、浅井辰郎教授を代表者とする文部省科学研究費「生産力的研究法による地理・地誌学の実証的研究」の備品の一つとして昭和46年に購入されたとのことである。地理学教室のみでジープを所有しているのは、おそらくお茶の水女子大学が日本の国立大学のなかで最初で最後のことではなかろうか。というのは、管理等の点で大学の一学科でジープを購入することの困難さが、いろんな大学のスタッフから指摘されているのを耳にするからである。このような観点からみて本学の地理学科のジープの購入は、日本の地理学会における一大壮挙といっても過言ではないであろう。

私の着任前、ジープは浅海・式両教授によってフィールド調査・野外巡検・学術研究および地理学教室の現在地への学内移転等多様に活用されてきた。私がジープを使い始めた時の走行距離は8,530 Kmであったが、現在36,394 Kmとなっている。この間ある1万キロは式教授による富士北麓の地形調査で、2万キロは浅海教授と筆者による戸隠・鬼無里巡検の下見で、3万キロは式教授による修論指導で達成されている。

運転日誌によると、これまで私が全走行距離の $\frac{1}{3}$ 強にあたる13,400 Kmを走破したことになっている。私は学会・学部巡検の下見、大学院巡検および個人的なフィールド調査にこのジープを使用させて頂いた。なかでも、利根川中流部の野菜生産、赤城山北西斜面の土地利用、栃木県高冷地の調査には充分活用させてもらった。また、現在、共同研究を進めているブナ帯の生活文化についてのフィールドワークも険しい山道をもものもしないジープなくては考えられないことだ。その意味で私は、浅井先生の購入されたジープの恩恵を最も多くうけた者の一人といえるだろう。

最近、浅海・式両教授は学務が多忙なことに加え、自家用車を冷房つき的高级車に買い換えられたため、ジープに乗る機会が少くなりつつあるのは残念なことだ。また、ジープの購入に多大の貢献さ

れた浅井先生と一緒にジープで旅行する機会がなかったのは残念なことである。いまになって先生と一緒に旅行しながら、先生の造詣の深い土地生産力や地誌についてのお話を伺い、かつ大切なジープを有効に使ってゆきたいと思っている次第である。

## 浅井先生の側面

貝山久子

浅井先生は大学へは大いなお弁当をお持ちになる。ここ数年は御飯でブック型のお弁当箱に一面魚・野菜を主とする数種類のお菜がところせましと並んでいる。その種類と量の豊富さに脱帽してしまうが、必ず野菜の煮物の二・三種類が副えられており、また地方の珍味などもあって、時々おすそわけにあずかることもある。主菜のお魚は先生が大学の帰りに、大塚駅付近の魚屋でまとめて買って帰られ、加工してフリーザーに保存されていたものであることもあり、また時には先生が自らお弁当をととのえられることもある。

以前は精養軒の雑穀入りの無漂白のパンをナイフで切って召し上っていたが、お菜は大きなタッパーウェアに入れて持参されていた。種類と量が豊富であったことは言うまでもない。先生は食べることにかなり関心を持たれ、バランスのとれた食事こそ健康維持の条件、と考えて居られるようで、好き嫌いなく何でも召し上り、亦珍しいもの（ゲテものではない）を召し上るのがお好きのようである。これは浅井家の家風のようにもお見受けするので、次女の文栄さんが埼玉大学教養学科の卒論に“食事文化論”を選ばれたのも故なしとしない。先生には今後ますますグルメぶりを発揮して頂きたいものと思っている。

× × ×

浅井先生には3人のお子様がお有りになるが、その中お2人はお嬢さんである。お父様としての先生がどういふ方か直接うかがったわけではないが、普段はあまりきびしくなく、理解のあるやさしいお父様のような気がする。昨年退職されたが、浅井夫人は戦後ずっと小学校に勤められていたので、浅井家の家事一切、御病気の治平先生やその付添さんの食事の世話まで、長女の建子さんがよくとりしきられていたようである。先生はフリーザーや電子レンジをいち早く購入され、“結婚した時に使い方を知らない困るから”とおっしゃって建子さんの家事の合理化を援けられた。建子さんの御結婚の時に“とても手離すのを惜しいとお思いませんか”とぶしつけに伺ったが、“世間の父親はそうらしいが、自分はちっとも淋しいとも惜しいとも思わない”と真顔でおっしゃった。これはきっと長い間の建子さんの御苦勞を多とされてのお言葉ではなかったかと思う。

次女の文栄さんは治平先生のおもごしを受け継がれた大らかでスケールの大きな方で“ゴーイングマイウェイ”の信念に満ち満ちていらっしやる。高校時代に先生は奥様に代ってPTAの集まりに出席したりもなさった。文栄さんの卒業論文のコピーを私もみせて頂いたが、ところどころにうすい鉛筆の細字で先生のかきこみがあった。文栄さんは大学卒業後さるベーカーリーでアルバイトをされた後栄養短大に入れ、この春卒業される。今後どのような活躍をされるか先生と同じ位に私もたのしみに